

図書 紹介

害虫の誕生－虫からみた日本史

著者：瀬戸口明久(大阪市立大学大学院)

発行：(株)筑摩書房／〒111-8755 東京都台東区蔵前 2-5-3／Tel.048-651-0053 (筑摩書房サービスセンター)／新書判／217頁／価格 720円 (税別)／2009年7月10日発行

虫は、江戸時代には自然発生するものだと考えられていた。そのため農業への被害はたたりとされ、それを防ぐ方法は田圃にお札を立てるという神頼みだけで、当時はまだ「害虫」は存在していなかったという。しかし、明治、大正、昭和と近代化の過程で、「害虫」として次第に人々の手による排除の対象となっていった。本書は、プロローグ、第1～4章、エピローグ、主要参考文献及び図版出典一覧から構成されている。

第1章 近世日本における「虫」

第2章 明治日本と<害虫>

第3章 病気－植民地統治と近代都市の形成

第4章 戦争－「敵」を科学で撃ち倒す

サブタイトルを見ていくと、プロローグでは、<害虫>とは何か、「害虫」という言葉、環境史という視点である。第1章の日本における農業の成立では、焼畑から定住型農耕、「蝗」の誕生、江戸時代人と「蝗」では、注油駆除法、「たたり」としての虫害、虫たちをめぐる自然観では、虫は自然にわいてくるなどである。第2章の害虫とたたかう学問では、西洋世界における害虫、アメリカ農学の誕生、化学殺虫剤の確立、ベダリアテントウムシ VS イセリアカカイガラムシ、明治政府と応用昆虫学では、「害虫」の発見、応用昆虫学の確立、札幌農学校の昆虫学、農民 VS 明治政府では、サーベル農政、筑後稲株騒動、文明開化と<害虫>、名和清と「昆虫思想」では、名和昆虫研究所の設立、明治政府と名和昆虫研究所、「昆虫思想」の普及などである。

第3章の病気をもたらす虫では、熱帯医学の誕生、蚊の根絶 VS 病原体の駆逐、植民地統治とマラリアでは、日本のマラリア－北海道と台湾、寄生虫学と植民地統治、竹を刈ってマラリアを根絶する、都市衛生とハエでは、ハエとコレラ－日本の場合、ハエのいない「美しい」都市、戦後日本と<衛生害虫>である。第4章の第一次世界大戦と害虫防除では、食糧問題の登場、天敵導入の開始、誘蛾灯の時代、毒ガスと殺虫剤では、毒ガスから殺虫剤へ－クロルピクリン、殺虫剤から毒ガスへ－青酸殺虫剤、第二次世界大

戦と農業—ドイツとアメリカ、マラリアとの戦いでは、米軍とマラリア (1) —DDT の発見、米軍とマラリア (2) —イメージの戦争、日本軍とマラリア—「衛生昆虫学」の誕生日、兵器としての<害虫>である。エピローグでは、近代国家と自然の均質化、戦後日本と<害虫>などである。

害虫の中でも一番に思いつくのはゴキブリではないか。ゴキブリが害虫として扱われるようになったのは、戦後になってからということを知った。どうしてその虫が害虫とされたのか。そして人間はその害虫に対してどのように接してきたのか。そこには意外な歴史も隠されている。ゴキブリ、蚊、蠅など日常生活では嫌われる虫、しかしその一面を見てみると意外と興味深いことに気づかされる。

本書は、近代以降に科学的、社会的側面から虫がいかにして「害虫」に仕立て上げられたか、近代以前の虫と人間との関係、明治政府が害虫駆除を広めるために作られた「害虫駆除唱歌」や戦前にあった蠅取りデーなど、「害虫」を駆逐しようとした挑戦は面白い。

「害虫」という小さな生き物が、近代国家形成、植民地統治や近代都市の形成、さらに戦争といった日本が直面した重要な局面と深い関係を持ってきたことが明らかにされる。

本書は、近年、医薬品や食品等の製造において製品に虫が混入してクレームとなるケースが多く、信用の低下や回収に至った場合の経済的損失など企業の受ける打撃は深刻であり、業界にとっては悩みであるが、その防虫・防除に従事している PCO 関係者には常識のことが多いとは思われるが、是非一読をお願いしたい。(学会事務局)